

芸妓物語 「牡丹悲話」

「坊やいくつ」牡丹さんはそう言うといきなり少年を抱き上げた。
白粉おしろいと鬢付油びんつけの匂いにどぎまぎしながら少年は「八つやっ」と答えた。
「八つなの。お名前は？」「かずきち」恥ずかしさに消え入りそう
な声である。
「そう、かずちゃんなの」と、牡丹さんはいきなり頬ずりしてきた
から、少年は目を白黒させた。

牡丹さんは本名が山田多恵、青森県ひろさき弘前ひとの女で二十八歳。昭和二
十七年の六月に福井県と石川県の県境にある温泉町、芦原へ流れて
きた芸妓さんである。

少年は此の町の老舗旅館（たにや）の次男、谷川和吉。お披露目
の挨拶に訪れた玄関先での出来事だった。

牡丹さんは色白のふっくらとした美人で、たちまち人気芸妓にな
り、（たにや）にも頻繁に出入りするようになった。彼女は帳場
に入るなり「かずちゃんいる？」と聞く。少年を見つけると駆けより
他愛もない会話を二言三言交わしてから座敷に入るのが常だった。

牡丹さんは唄と三味線を受け持つ地方である。芸妓さんが使う三
味線みせんは細棹ほそさおだが彼女はどっしりとした太棹ふとさおを使う。
「津軽じゃ三味線は太棹なの」と言う。たしかに彼女の津軽三味線
は力感にあふれていた。

その三味の音しゃみにも増して声は力強く、情感たっぷりの唄声は客を
魅了した。テンポの速い前奏から始まる三味線の音に、それまでざ
わついていた宴席は一瞬静まりかえり、酔客は盃を置く。

牡丹さんは三味の手を止め、よく伸びる高音で唄に入る。絶妙な
間合いで三味の音が入る。唄と三味線が交互に続き、やがて唄と音
が一体となり、いつしか唄い終わると、余韻を三味の音が引きずり
、最後に止撥とめばちで締める。

絶妙な撥捌きばちさば、情感たっぷりの唄に客は酔う。なかには感動のあ

まり涙する者さえいた。まさに名人芸、圧巻であった。

弾き終わると一斉に拍手が湧き客は競って盃を勧めた。牡丹さんはとびっきりの酒豪で断ることもなく次から次と盃を空けていった。彼女の酒は豪快で加えて笑い上戸だからいつも^{まわり}周囲を明るくさせた。

座敷を終えた牡丹さんがロビーに下りてくると、そこには少年が待っていた。彼女は近づき、少年の頬を両手で挟み、「早く寝なさいよ」と微笑んで言う。うっすらと赤みを帯びた目もと、微かに漂う酒の匂い。少年はうなずき自室へ戻った。少年が去ると上機嫌で帳場に挨拶をして玄関を出る。いつもそうだった。

ただ一度の悲しく、哀れなまでに酔った姿を除いては・・・。

三十一年の正月、新年の宴会での出来事だった。いつものように牡丹さんは津軽の民謡を弾き、唄を披露していたのだが、上座の客（彼は主賓だった）が五木の子守唄を望んだ。五木の子守唄は熊本県五木村に伝わる民謡で、二十七、八年頃からラジオを通して全国に広まっていた。ただ余りにも哀しすぎる民謡で、新年会のような祝いの宴席で披露されることはなかった。

昔、五木地方は旦那衆と呼ばれる少数の大地主に支配され、村人は小作人となって旦那衆に仕えていた。^{やまあい}山間の田畑の乏しい集落、村人の暮らしは貧しく、子供たちも十歳になる頃には口減らしのために旦那衆のもとで年季奉公せざるを得なかった。

五木の子守唄は年季奉公の娘が惨めな境遇を唄い込んだ民謡で、唄に流れる絶望感は戦後復興に歩みだした国民に戦中戦後の悲惨な記憶を呼び起こして、当時流行^{は や}っていたのである。

いつもは客の要望を即興で応じる牡丹さんだったが、この時は違った。

「恨み唄です。正月には相応しくありませんよ」と、彼女はやんわり断った。男は面子^{めんつ}を潰されたと感じたのであろう、引き下がらなかった。

「言われた通りにしろ！」と声を荒げた。

牡丹さんは困惑の表情を浮かべ、
「他の唄にしてくれませんか」と、言ったのだが、男はあっそう苛立ち、「黙って唄えやいんだ！」と、怒鳴った。

男の剣幕に他の客が鼻白^{はなじろ}み、皆の視線が彼女に注がれた。
（確かに場違いな唄だが、たかだか酔客相手の座敷芸じゃないか、客が望めば応じればよいのさ。嫌ならさわりだけでも唄えばいい、それが芸妓だろう）と、非難の眼差しを牡丹さんに向けた。

華やいだ宴席は一瞬にして気まずい雰囲気変わった。たまりかねた先輩芸妓が牡丹さんに、

「なぜ断^わるの、理由がわからないわ。このままでは貴方だけでは済まないのよ。こちらさんにも迷惑かかるのよ、分かっている！」と叱った。この団体は（たにや）の上得意客であった。

牡丹さん黙^{うつむ}って俯いていたが、静かに弦^{いと}を弾^{はじ}き始めた。
気持ちを静めるようにゆったりとした撥^は捌^はき、抑えた音にももの哀しさが漂う。長い前奏がおわり、唄い始めた。切々と微かに声がふるえている。

「おどま^{ぼんぎ}盆限り盆限り 盆から先やおらんと 盆が早よ来りや早よ戻る」

ゆったりとした間奏が入り、ふっきれたように声を強めて唄う。

「おどま^{かんじん}非人非人 あん人達や良^よか衆^し 良^{しゅう}か衆 良か帯 良か^{きもん}着物」

一呼吸おいて三味の音が続き、撥が止まる。また語るように唄う。

「辛いもんだな 他人の飯は 煮えちゃおれども喉にたつ」

津軽三味線特有の撥の激しい動き。長い間奏を終え、唄う。

「おどんがお父つあんな あの山やおらす おらすと思えば行こごたる おらすと思えば行こごたる」

撥が強く弱く波打つように弦を弾き続ける。静まり返った座の中で三味の音が響き渡り、臨場感を誘う。と、撥の手が止まる。一呼吸おいて声を振り絞るように唄う。

「おどんが打死^{うっ ち}んだちゅうて 誰^{だい}が泣^にやあて 呉^くりゆか 裏ん松山蟬が鳴く」

弦を強く二度、三度と弾^{はじ}き、声を押さえて唄う。

「蟬じゃごんせぬ 妹^{いもと}でござる。妹泣くなよ気にかかる」

激しく撥が弦を弾き続ける。一転、三味の音が弱まった。唄う。

「おどんが打死^{みちばちや い}んだば道端埋^ごけろ 通る人每ち花あぎゅう」

弦を二度三度弾き、唄う。

「花はなんの花 つんつん椿 水は天からのもらい水、もらい水」

唄い終わると激しく弦^{いと はじ}を弾き続けた。辛い過去の悪夢を打ち消すように技の限りを尽くして弦を弾き続けた。

最後の止撥^{とめばち}が響いたとき、静寂が戻ったのだが、余韻で座が異様な雰囲気^ひに包まれていた。誰もがあまりにも激しく、哀しい唄に言葉を失っていた。悲しそうに弾き、唄う女の姿。聞く者を圧倒する技量。二つが一体となり、感動を呼んだ。

皆、この唄に込められた悲しみ、絶望感^ひは彼女自身の過去であることを理解した。

沈黙の時間が流れた。芸の凄さに皆が茫然自失となっていた。やや間があって一人が我に返り、二度三度と手を叩いた。それが合図のように皆が一斉に拍手した。牡丹さんは深々と頭を下げて座敷を離れた。

注) 五木の子守唄 訳

私の年季奉公はこの盆で終わります。盆から先はおりません。盆が早く来てくれれば早く郷に戻れます。(でも戻ったところで、また奉公に出されるでしょう)

私は貧乏百姓の娘、蔑まれて生きています。あの人たちは旦那衆で立派な衣服を身につけ贅沢な暮らしをしています。（それに比べて私はなんと惨めでしょうか）

辛いものです、他人のご飯を遠慮しながら食べることは。ご飯は煮えているのですが、周囲の目が（あんまり食うなと言っているようで）気になり、ご飯が喉を通りません。

私のお父さんはあの山の向こうにいるそうです。それならあの山に行きたい。訪ねてお父さんに逢いたい。

私が死んだところで、誰が泣いてくれるでしょうか。裏山の松林で蟬が鳴くぐらいでしょうか。

あの泣き声は蟬ではなく、妹のようです。泣かないでおくれ。あなたのことが心配になります。

（私が死んでも誰も墓参りしてくれないでしょう）それなら道端に埋めてください。通りすがりの人が（哀れに思い）花を手向^{たむ}けてくれるかも知れません。

花は野辺に咲いている椿をお願いできるでしょうか。椿なら雨水だけで花を咲かせるでしょうから。

牡丹さんが戻ったのはそれから一時間ほど後で宴会は終わりにかけていた。それでも咎める者はおらず、「悪かったな」とあの男は声をかけ宴席を後にした。

牡丹さんはひどく酔っていた。ふらつきながら誰もいない照明^{あかり}の消えたロビーに辿^{たど}りつくると椅子にもたれ込み泣いていた。その姿を少年は心配そうに眺めていた。

牡丹さんはその日から座敷を休んだ。七日後彼女は（たにや）を訪れ女将の久江に詫びを入れ長い間話し込んでいた。久江は話を聞き終わると「忘れなさい」と言い、
「明日から座敷に出るのよ」と念を押した。

翌日牡丹さんの「かずちゃんいる？」の声を聞きたくて少年は座敷の終えるのをロビーで待っていた。

「こんなに遅くまで起きてちゃだめよ」と彼女は言い、うっすらと汗ばんだ頬を少年の頬に寄せてきた。甘酸っぱい体臭に白粉と酒が混ざり合った匂いは思春期の少年を興奮させ、その夜牡丹さんの夢を見た。

その年の四月八日、牡丹さんは少年を伴い鯖江市の誠照寺^{じょうしょうじ}に出かけた。この寺は浄土真宗誠照寺派の本山で、この時期、境内の桜が見頃とあって多くの善男善女が訪れる。門徒の久江が花見を兼ねてのお参りを勧めたのである。

鯖江市の寺町に壮大な山門があり、それが誠照寺の四脚門^{しきやくもん}で、門をくぐると手前に鐘楼堂^{しょうろうどう}、満開桜に覆われた境内の正面が御影堂^{みえいどう}、左が阿弥陀堂^{あみだどう}の大伽藍^{だいがらん}である。

堂内に入ると牡丹さんは
「いっしょに拝みましょう」と誘い、手を合わせて
「南無阿弥陀仏」をずいぶん長い間唱えていた。ときおり聞き取れないほどの小さな声で阿弥陀さまに向かって語りかけていた。
少年も手を合わせて拝んでいると、
「かずちゃん、ありがとう」と言い、うっすら涙を浮かべていた。

お参りを済ませ境内を散策する和服の牡丹さんは、誰もが振り返るほど艶やかで美しかった。ふたりがベンチに座って桜を眺めていると、路上写真屋が「写真いかがですか」と勧める。
牡丹さんは恥ずかしがる少年の肩を抱き寄せ、
「かずちゃん笑って」と促し写真を撮らせた。

その日から十五日後の四月二十三日未明、けたたましい汽笛が温泉街に鳴り響いた。列車の運転士が駅前の民家から上がる炎を発見し、警笛音を鳴らす紐を引き続けたのである。

間もなく消防車が到着し、消火活動に当たった。サイレンの音に野次馬が駆け付け消火活動を見守っていた。最初彼等は直ぐに鎮火すると思っていた。目の前の火災がまさか我が家を襲う大火になる

とは思っていなかった。

春の北陸は空気が乾燥している。火災は容易に収まらなく、隣家に延焼した。勢いを増した炎は上昇気流を生み、火の粉が四方八方に飛び散った。

「大火になる！」野次馬から一転、我が家に戻り、躍起になって家財を運び出した。

飛散した火の粉は温泉街のあちらこちらで火災を引き起こし、数台の消防車ではもはや手の打ちようがなかった。家財、商品を荷車で運ぶ人々で道路は大混乱に陥り、消火活動は困難を極め、火災は温泉街全域をほぼ焼き尽くして鎮火した。

焼け野原のなかで、我が家跡に茫然と立ち尽くす人々。家と職を失い、やがて此の町を去る人々も少なくはなかった。再建をあきらめ廃業する旅館もあった。

大火から一ヶ月後、焼け跡にバラックの簡易浴場が建てられ町民に開放された。町を流れる小川に湯気が立ち、温泉独特の匂いがたち込めていた。人々の表情に活気が戻り、町は着々と復興への^{みちのり}道程を歩み始めた。

だが、旅館の営業再開はまだ先だった。働き場を失った芸妓さんの多くが隣県の温泉場に移り、芦原の復興を待っていた。

牡丹さんは故郷弘前に近い大鰐温泉で働くことになった。此の地は建^{けんきゅう}久年間（千百九十年代）に開湯された津軽地方屈指の名湯である。牡丹さんのお母さんは大鰐温泉の芸妓さんで、一人で暮らしの淋しさから、以前より故郷に戻るように懇願していたのである。

牡丹さんが芦原を去る日が来た。

「必ず戻ってくるからね」彼女は少年の手を握り締め約束した。列車がホームから離れるとき、牡丹さんは窓から身を乗り出し、手を振り続けた。その姿が見えなくなったとき、少年は悲しく、無性に切なくて涙が止まらなかった。

一年二年と過ぎ温泉街は復興し芸者さんたちは戻ってきた。その間牡丹さんは四季折々に手紙を寄こした。

「母が淋しがりますので、もうしばらくこちらにおります。でも必ず戻りますから・・・」としたためられており、津軽風景と彼女の写真が同封されていた。

少年は写真を眺めながら「必ず戻りますから・・・」の末文を何度も読み返し、牡丹さんとの思い出に耽っていた。だが彼女は戻ってこなかった。

三十三年十月の手紙に少年は胸騒ぎを覚えた。

「芸者を退きました。必ず戻ると約束したのに果たせそうもなく悲しい気持ちで日々を送っております。貴方には申しわけない気持ちでいっぱいです」と書かれていた。

少年は大鰐に手紙を出したが返送されてきた。

連絡が途絶え不安と焦りの日が続き、牡丹さんの夢を見るようになった。三味線を弾いている。だが音が出ない。必死に音を出そうとしているが音は出ない。悲しそうに三味線を抱きしめている牡丹さんが夢の中にいた。

三十四年二月十一日、宮田勝男と名乗る牡丹さんの弟さんが（たにや）を訪れた。彼は久江と和吉に信じられない、悲しい報せを持ってきた。

「姉は去年の春から体調を崩していました。微熱が続き痩せてきたのです。本人は大丈夫と言っていたそうですが夏になると嘔吐を繰り返し、黄疸の症状が表れるようになりました。心配した母が弘前の病院で検査を受けさせたのです。

診断は肝臓癌、しかも癌が肝臓全体に広がり手の施しようがなく苦痛を抑える治療しかできないと告げられたのです。

一月ほど入院していたのですが本人と母の希望で自宅療養に切り替えました。年内は病状もさほど悪化せず体調の良い日には三味線を弾いていました。和吉さんのことも楽しそうに語っていたのです。

それが年を越してから急激に悪化し再入院しました。病院でも手立てはなく食事も水も受けつけず点滴で辛うじて生命を繋いでいる状態でした。それも長続きせず今月に入って昏睡が続き三日の未明に息を引き取りました」

少年は蒼白になり震えていた。頬に幾筋もの涙を流していた。久江は少年を叱りつけた。

「勝男さんとおっしゃいましたね。多恵さんのこと、この子に話してくれませんか」と、言った。

勝男は黙っていた。ためらっている様子だった。少年の顔を見つめて、

「姉の過去は悲惨でした。聞けば辛くなるだけです。それでも知りたいですか」と、言った。少年は^{うなづ}頷いた。

「そうですか・・・」彼は牡丹さんの過去を語り始めた。

私たちの父は弘前で造り酒屋を営んでおりました。津軽地方では名の知られた^{しゅぞう}酒造です。父は芸妓の母を見染め、退かせて妾としたのです。^{おおたな}大店の主人が別宅に妾を^{あるじ}囲うことは珍しいことでなく、経済力があれば許されていました。

もちろん妾は低く見られて、^{さげす}蔑まれることもありましたが、私たちの場合、^{まわり}周囲にあからさまに蔑む人はおりませんでした。

父が名の知れた酒造の主人で人望があったこともありましたが、経済的に恵まれていたことも理由でした。私たちはよそ様よりも贅沢な暮らしをしていたのです。

近所の店屋から遠くの小間物屋、呉服屋に至るまで、父の馴染みの店で、私たちも彼等の上客でしたから悪口、陰口など言うはずありません。道で逢えば子供の私たちにまで挨拶をしてくれ、お世辞を言うのです。

父のお陰でした。父は母を愛していましたし、私たちを可愛がってくれましたから、何ひとつ不自由させなかったのです。そんな私たちを^{ねた}妬んでいた人が大勢いたことは後で知りました。

その父が心臓の発作で突然亡くなったとき、私たちの暮らしは一変しました。姉が九歳、私が七歳のときでした。

父の葬儀に参列することはできませんでした。

父と本妻の仲は陰悪で、それは私たちの存在が理由でした。本家の人たちは私たちを憎んでおり、敷居を跨ぐことを許さなかったのです。

初七日の翌日、本家の代理人と称する人が手切れ金を持参し、以後の絶縁を告げました。そのうえ別宅の明け渡しを求めたのです。途方に暮れた母は弁護士に相談しましたが、しょせん妾の立場はそういうものだと言われ、受け入れざるを得ませんでした。

困窮するにはさほど時間がかかりませんでした。世間は冷たいもので、あれほどお世辞を並べていた連中が、陰で母のことを、「妾は妾だよ。わきまえて少しは遠慮しておれば、本妻からあれほど憎まれることもなかったろうに、自業自得さ」と、悪口を言う始末です。

大人の態度の変化は子供たちにも影響しました。それまで普通に遊んでいた子供たちまでが意味もわからず、

「妾の子、父なし子」と口にするようになったのです。気の強い姉はその言葉に食ってかかりましたが、それを面白がり、さらにからかい、囃したてるのです。

私たちは自然と子供たちと遊ぶこともなくなり家に閉じこもりました。姉は母の三味線を見よう見まねで弾くようになりました。母はそれを許したのです。

母は芸妓に戻りました。それ以外に生活の手立てがなかったのです。ただ独身ならともかく、二人の子供を養ってゆくのは並大抵ではありません。毎日が貧乏を絵に描いたような生活でした。悔しいことに貧乏がさらに蔑みの対象となりました。

母は哀れに思ったのでしょう、私を姉の嫁ぎ先である宮田家の養

子に出したのです。宮田の家には後継ぎがいなかったのです。姉にも養女の話があったのですが手元に置きました。

母は津軽三味線の名手で、芸妓では津軽一と称されていました。その母が姉の才能を認めていたのです。技を伝えたかったのでしょう。姉に稽古を付けました。

それこそ血の滲む稽古でした。稽古の辛さに幼い姉が泣くと、「妾の子、父なし子と蔑まれて悔しくはないのか。津軽一の三味線弾きになって見返せ。それしか悔しさを晴らす方法はないんだ」と叱りつけ、稽古を続けさせたのです。

姉は幼いながらも耐えて稽古に打ち込みました。十八歳の頃には母を凌ぐ名手となっていました。しかし戦時中とあっては、芸を生かせるような場所はありません。せいぜい将校相手の宴席で披露する程度が関の山で、とても暮らしていけません。

戦況激化に伴い、働き盛りの男が次々と徴集されますと農家は人手不足に陥り、老人、女子供まで動員されました。母と姉も弘前郊外の農園で働き、僅かな給金で生計を立てていました。

働き始めて半年ほどのことです。農園の一人息子、高岡健吉さんと姉は恋仲になりました。高岡家は旧家の大地主です。健吉さんは両親に姉との結婚を懇願したのですが、認められるはずありません。即座に反対され、二人は引き離されました。母も身分不相応な結婚は不幸の始まりと反対でした。十八年のことで姉が十九歳、健吉さん二十二歳のときでした。

周囲の反対が強ければ強いほど二人の思いは募り、思いつめて駆け落ちをしたのです。

半年後、二人の居所が発見され、連れ戻されました。別れるように説得されたのですが、頑として応じませんでした。姉が身籠っていたのです。高岡の家は渋々二人の結婚を認めました。息子は健吉さん一人で、姉二人がいましたが嫁いでおり、後継ぎは健吉さん以外にいなかったのです。

その年の師走、二人は入籍しましたが式は挙げませんでした。高岡の家にとって姉は受け入れ難い嫁でした。由緒ある旧家の嫁が妾

の娘では体面が保てぬと考えていたのでしょう。

高岡の家で姉は嫁ではなく、女中として扱われました。使用人と同じく早朝から働き、高岡家の人間は座敷で食事をするのですが、姉は使用人と同じく台所です。皆が帰った夜も雑用にこき使われていました。

舅^{しゅうと}、姑^{しゅうとめ}、義理の姉から見下されていました。それだけではなく姑は使用人に嫁扱いするなど言い含めていました。彼等も姉に同情するのではなく、妾の子と陰口を叩き、姑と一緒に頑張っていただけです。

彼等は姉をいびりぬいて追い出すことを目論んでいましたが、姉は耐えていました。今逃げだせば、生まれてくる赤子は自分と同じ父なし子になる。そんな惨めな思いを我が子にさせたくなかったからです。

健吉さんは気持ちに優しい人でしたが、気が弱く争いごとを避ける性格でした。妻の苦勞を見ながらも、「今は我慢してくれ。子供が生まれれば、親父もお袋もきっと変わる」と言いながらも、親には何も言えませんでした。

翌年三月始め、健吉さんに赤紙がきました。出征を見送った姉は実家に戻りました。産み月に入っており、実家で出産するためです。

四月五日、男児を出産、宏一と名づけました。出征の間際に健吉さんが決めていた名です。出産後も姉は高岡家に戻らず、実家で暮らしていました。あちらでも厄介払いができたとも考えたのでしょう、帰れとは言いませんでした。

二十年の二月、突然の悲報が高岡家と姉を襲いました。

『19年月、高岡健吉レイテ島にて戦死』との戦死公報が高岡の家に届いたのです。姉は悲嘆のどん底に突き落とされました。宏一を抱きながら泣き崩れました。

それは息子を溺愛していた高岡の舅^{しゅうと}、姑^{しゅうとめ}も同じでした。彼等は悲しみを息子の忘れ形見の孫で埋めようとしました。それに宏一は唯一人の後継ぎでしたから、是非とも引き取る必要があった

のです。

姉に宏一を伴って戻るように人を介して伝えてきたのです。
宏一を高岡家の後継ぎにするとの一札が添えられていました。姉は迷ったのですが我が子の将来を考え承諾したのです。

高岡の家に戻ると、姑は姉か子供を引き離して遠縁の女に世話をさせました。旧家のしきたりに精通している人間に躰を任せたいとの理由でしたが、それは嫁から孫を奪う口実に過ぎなかったのです。

宏一が風邪をひきました。心配した姉は看病を申し入れたのですが女は、
「風邪くらいで心配しないで、私が面倒見えていますから」と、取り合ってくれませんでした。言葉とは裏腹に女は面倒など見ていなかったのです。

宏一は風邪をこじらせ肺炎を引き起こしました。戦後間もない時代で薬も手に入らず、病状は悪化する一方で、姉は衰弱してゆく我が子を抱きながら泣くだけでした。

宏一は二十一年四月八日、わずか二年と四日の生涯を閉じたのです。姉は半狂乱になって嘆き悲しみ、高岡の家に戻った自分を責めました。そして舅、姑、女を恨み罵ったのです。

そんな姉を高岡の家は離縁し、母のもとに戻したのです。

家に閉じこもり悲しみを振り払うように三味線を弾く姉ですが、その音は弱々しく哀しいものでした。世間から蔑まれ、我が子を奪われ、死に追いやられた無念さに、高岡の家を恨み、世間を恨んだのです。

忘れようにも我が子の面影が浮かび、脳裏から消そうとしても離れず、後悔に苛まれ、酒を浴びるように飲み、それでも三味線を弾き続けました。

（^{しいた}虐げられたまま朽ち果ててなるものか、必ず立ち直る）その執念で三味線に打ち込んでいたのです。

一年後、やっと三味線に力強さが戻りました。悲しみを克服したのです。辛い過去と決別するために、姉は故郷を離れました。流れ芸者となり各地を放浪しました。

しかし過去とは決別できませんでした。流浪の地で我が子を思い出し、孤独感に苛まされました。その都度、母のもとに戻ったのですが、それも二、三ヵ月で、また旅にでました。そのくりかえしだったのです。

貴方に逢ったとき、我が子の面影を見つけたのでしょう。貴方に絃一を重ねていたのです。孤独から解放された姉は故郷に戻ることはありませんでした。あの大火までは・・・。

可能なら近くで成長を見守りたいと願っていました。病に侵されその望みが叶わぬことと知ったとき、姉は再び絶望の淵に突き落とされたのです。

貴方に病状を知らせ、面会に来てもらうように勧めましたが、「こんな姿を見せたくないわ。あの子にだけは昔のままの私でいたい」と言い、連絡を絶ったのです。

二枚の写真を枕元に置いて、いつも穏やかな表情で眺めていました。思い出を心に刻んでいたのでしょう。

臨終間際のことです。姉の顔に笑みが浮かびました。楽しい思い出が心を過ったのかも知れません。姉の一生は不幸そのものでしたが、それでも数少ない、ささやかな幸せを心に焼き付け微笑みながら旅立ちました。

最後の瞬間、姉は幸せだった、そう信じるようにしています。

彼は二枚の写真を少年に差し出した。一枚は笑っている赤子を愛おしそうに抱く牡丹さんの写真。もう一枚は満開の桜の下で艶やかに笑っている牡丹さんと肩を抱かれ、はにかみながら笑っている少年の写真だった。

牡丹悲話 了。

